

## 虹の兵士たち

2008年 ブルーレイ カラー 125分 インドネシア 日本語・英語字幕付き

監督：リリ・リザ

製作：ミラ・レスマナ

脚本：サルマン・アリスト

リリ・リザ

撮影：ヤディ・スガンディ

音楽：アクサン&ティティ・シュマン

出演：チュッ・ミニ

ズルファニ

フェルディアン

イクラナガラ

※ブルーレイ・ディスクは35ミリプリントからテレシネにより作成したものです。日本語字幕が見つらい箇所があります。ご了承ください。

### (物語)

インドネシアの自然豊かな小さな島、ブリトン島。スズ鉱山で有名なこの島は、鉱山の国有化により大きな貧富の差を生み出していた。1974年、イスラム教の学校であるムハマディヤ小学校は、最低10名が入学しなければ学校閉鎖という危機的状況にあったが、ハルファン校長と新任の若い女性教師ムスリマは新入生の入学を信じ、心待ちにしていた。そして始業式当日、奇跡的にちょうど10名が集まり、小さな学校はなんとか存続することとなる。

子どもたちは、文学好きのイカル、漁師の息子で頭脳明晰なリンタン、常にラジオを持ち歩き音楽・アートに秀でたマハルなど、個性豊かな生徒ばかり。隣接するスズ公社附属小学校には裕福な子どもが通う一方、ムハマディヤ小の生徒は貧しい労働者の子がほとんどだった。校舎や設備は老朽化し、学校は常に資金難で、教員の数も少ない。しかし校長は10人を神から授かった子どもたちとして慈しみ、各教科だけでなくイスラム教育や道徳も教え、ムスリマらと共に日々奮闘していた。

子どもたちは自然豊かな学校生活の中、健やかに成長する。5年の歳月を経たある日、ムスリマは生徒たちと共に美しい虹を目にし、愛情を込めて彼らを”Laskar Pelangi”「虹の兵士たち」と名付ける。ムスリマは亡父も勤めたハマディヤ小での教職を選び、無給の時は内職をしつつ、貧しい子どもたちへの教育に熱心に取り組んでいた。しかし、イカル達以後の入学者はなく、唯一の同僚教師だったバクリも、給料の支払いが滞る状況ゆえに学校を去ってしまう。

そんな中、同校は学校のPRのため独立記念祭に初参加し、演目を披露することになる。他校のように新しい衣装や装具は調達できないが、リーダーを務めるマハルのアイディアによって独創的なパフォーマンスを披露し、見事優勝するのだった。

## 「虹の兵士たち」「夢追いかけて」の原作者アンドレア・ヒラタ

アンドレア・ヒラタ (Andrea Hirata)

1967年10月24日生。「虹の兵士たち」(Laskar Pelangi)は、彼の生まれたブリトン島の村を舞台にした自伝と呼んで良い作品で、語り手イカルは作者の分身である。イカルたちの成長を描く四部作の第一部だ。

スマトラの東南部にあるこの島は70年代を通じて錫鉱山で大いに潤ったが、一方で住人の間に大きな経済格差を生み出した。彼自身が本作を、「世界で最も豊かな島だったのに、子供たちから教育の機会が奪われていたアイロニーを描いた」と語っている。2005年に刊行されるや500万部（海賊版を含めると1500百万部）を超える大ベストセラーとなった本作には、映画化テレビ化のオファーが殺到したが、アンドレアは容易には受けなかった。「舞台は島の小さな村だが、しかしインドネシアで起きている現実、その歴史と実情がここに如実に顕われている。それを表現できる人たちに映像化を任せられた」からだ。

潰れ掛けた貧弱な学校の3人の先生と10人の生徒たちが、何もないが故に自由な発想と工夫により、裕福な学校の生徒たちを凌ぐ物語で、それを明るく前向きに描いている。しかし一方で、子供たちを巡る環境を、真正面から見据えている。たとえば映画の冒頭は、村の人々が必死で働く活気に満ちたシーンを垣間見せるところから始まる。そんな村の誰彼の家から、子供たちが一人、また一人、学校に集まって来る。リリ・リザ監督は、その日その日を必死にやり繰りする大人たち、ボロボロの校舎の修理もままならず、物資に事欠いて先生の給料もきちんと払えない学校の実情を、並行してそんな窮状を皆んなで助け合っしてしのぐ姿をさり気なく、しかし丁寧に描いて行く。

また、島の自然の描写も素晴らしい。浜辺から望む海の美しさ、虹の素晴らしさ。丸い巨大な石がゴロゴロ転がる不思議な風景の中を、子供たちが走り回る。漁師の子供は浜辺から遠い学校まで自転車で行くが、途中でしょっちゅうワニに出会う。まさにこの島のこの村に限らない、インドネシアの歴史であり実情であろう。

2006年に刊行された続編「夢追いかけて」(Sang Pemimpi)は、小学生だった語り手が高校生になった80年代を描く。錫鉱山が閉山され、裕福だった学校も閉校に。時代の移り変わりは、人々の暮らしもガラリと変えてしまう。イカルと新しい友との出会い。彼らは馬を手に入れることを、そしてヨーロッパに行くことを夢見る。続く第三部「Edensor」、第四部「Maryamah Karpov」で、語り手たちは奨学金を得てヨーロッパに留学し、文化の違いに苦闘しつつ、未来を切り開いてゆく。アンドレア・ヒラタ自身、インドネシア大学の卒業後はヨーロッパに。パリの、そしてイギリスの大学に留学して修士号を得ている。

友成純一(作家・映画評論家)

## リリ・リザ監督プロフィール

1970年生まれ。ジャカルタ芸術学院映画学部卒業後ロンドン Royal Holloway 大学で長編劇映画脚本学を専攻し修士課程を修了する。1994年、ドイツのオーバーハウゼン短編映画祭で「Sonata Kampung Bata」が受賞に輝き、注目を浴びる。1998年、「クルドサク」(Kuldesak)を発表し、ロッテルダム、ドービル、シンガポール、フィリピン等の国際映画祭で上映される。2000年に完成した音楽ドラマ「シェリナの大冒険」はインドネシアで大ヒットを記録する。2002年に演出と脚本を担当した「エリアナ・エリアナ」は、シンガポール国際映画祭でヤングシネマ賞及び国際映画批評家連盟 (NETPAC) 賞、バンクーバー映画祭で特別賞、フランスのドービル映画祭で最優秀女優賞に輝く。2005年に演出・脚本を担当した「GIE」はインドネシア・フィルム・アワードで最優秀作品・男優・撮影賞、またシンガポール国際映画祭とアジア太平洋映画祭で審査員特別賞を受賞する。次作の「永遠探しの3日間」(’06年)はブリュッセル国際映画祭で最優秀監督賞に輝く。「虹の兵士たち」(’08年)はインドネシアで興行収入第一位を記録し、ベルリン国際映画祭(’09年)にも招待された。

(アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより)

## 監督メッセージ

豊かな天然資源に恵まれ熱帯雨林におおわれ繁栄しているのが自分の国だと、私は小さい子どもの頃から聞かされており、それをずっと信じていました。ですから自分のまわりに貧困が蔓延していき、それがまるで過ぎ行く時間と競争しているかのような速さで広がっていくのを目の当たりにすると、感慨深い思いがします。この世界最大の島国である私の母国では、いったいなにが起きているのでしょうか？いったいなぜその豊かな資源が、国民の大多数から災いのもとと呼ばれるようになってしまったのでしょうか？これこそまさに私が「虹の兵士たち」で描きたかったことであり、インドネシアのスマトラ南部にあるブリトンと呼ばれる豊かな島に住む貧しい子供たちの矛盾にあふれた生活を描こうと思ったのでした。また私自身が主人公のイカルであるともいえます。なぜなら彼の関心事を私も同じように感じることができるからです。私にとってこの映画は、美しく苦くて甘い詩を歌う作品です。それは、一方では悲しみの中から優しさが現れるように最大限の努力をしながらも、物語を公正に正直に伝えようとする大胆な情熱から生まれ出てくる詩なのです。

「虹の兵士たち」は、アンドレア・ヒラタのベストセラー小説にもとづいていますが、子ども時代の思い出から多くの部分が生み出されています。ある闘いの美しさをささやくように描いており、その闘い自体もまた詩的に描かれています。イカル、リントン、マハルと他の虹の兵士たちは、自らの運命を自分たちの手で選ぼうとする人々の闘いを象徴する存在です。それ以上に彼らはまた、私たちを注意深く子ども時代の記憶へと導き、小学校時代

や一緒に育った仲間や、それぞれ個性の違う先生たちなどを思い出させてくれる存在でもあります。この映画をつくることで、私はまた自分の先生たちに最高の敬意を表す榮譽をもつことができました。そういった先生たちは、必須科目の教科書に書いてあること以上のことを私に教えてくださいました。この作品は、適切で価値ある教育を支えることに信念をもち、自らの言葉と行動のひとつひとつにも、その信念を込めていた先生たちへ私からの賛辞として捧げられたものです。

リアリズムあふれる作品は、常に私を感動させてくれます。その例として私が尊敬する日本人の映画監督ふたりをあげましょう。私は小津安二郎監督の大ファンです。彼の卓抜した作品のおかげで、私は日本の様々な感動的な生活の場面を知ることができました。また同時にストーリーテラーとして巨匠である宮崎駿監督に対して、その抜きん出た芸術的才能をともなった彼のすばらしい想像力に対する自分の賞賛の思いを消すことができません。1970年代のブリトン島における想像の物語を生み出し語る上で、私自身にも私の製作チーム全員に対しても、このふたりの日本人監督が影響を与えたことは否定できません。

母国のすばらしい仲間に関心があることを、以前にも増して納得できるようになったのは、私が「虹の兵士たち」の制作をすべて終え作業を完了した後になってからのことでした。彼らのもつ文化的多様性と、それゆえに互いに違いがあるにも関わらず他者を受け入れ合おうとする意志こそが、その強さだと思います。

インドネシアで映画をつくるのは独立した仕事です。映画製作は常に資金面の問題と衝突します。したがって。前作と同じように今回も再び映画プロデューサーのミラ・レスマナとパートナーを組み、マイルズ・フィルムズ・プロダクションと一緒に仕事できたことを、私は非常に感謝しております。私たちは制作にともなう課題と一緒に取り組みました。そしてこの映画が特にインドネシアの人々に受け入れられ、さらにできれば多くの世界中の人々に受け入れられるようにと、私たちは一緒にベストを尽くしてきました。

アジアフォーカス・福岡国際映画祭で再び私の作品を上映できますことを、私は心から誇りに思います。映画祭の場は、その会場の福岡市とともに、私にとって特別な場所になりました。たくさんの心やさしい友人たちで一杯の場所だからです。この「虹の兵士たち」が、福岡市民の皆様にとって、特別な時間をもたらす作品であるようにと願っております。

(アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより)